

論 文

「態度」「信念」に関わる「現象経験」と「測定」

Attitudes and Beliefs : Phenomenal experience and measurements

妻 藤 真 彦

1. 序

機能的に心理学上の理論を立てていく限り、意識に関する「現象経験」を扱うことはできそうもない (e.g., Marcel, 1988; 妻藤, 1990; 1994)。しかし、かといって「意識」内での (現象経験に関する) 閉じた因果関係 (see 妻藤, 1994) を見いだすために必要な理論上の前提は、まだ十分に分析されていないと思われる。本稿の目的は、この点についてのメタ理論上の議論である。社会心理学における「態度測定」や「意識調査」が、「実際には」何を反映しているのか (あるいは、そもそも「態度」とは何であるのか; Eiser, 1994), そして、同様に基礎心理学における各種の測定の意味を問いなおす必要がある。以下で議論するように、「意識内容」を、ある「測定」が、うまく反映しているかどうか、つまり測定結果の違いが、「意識内容」の違いを反映しているのか、あるいは「反応選択」のバイアスを反映しているだけなのかという単純な2分法に基づく論争にはほとんど意味がない。

2. 機能的測定

意識内容と (それを表現すると想定される) 測定の関係については、現代認知心理学の初期において、測定結果を左右する知覚成分と反応選択成分の分離問題として扱われた (see 柿崎, 1967; 1974)。例えば、瞬間呈示された視覚刺激の同定あるいは強制選択課題において、「知覚的構え」が正答率をかなり大きく左右する。論争点はこれが、知覚された「見え」(意識内容)の明瞭さを変えているのか、単に反応選択(判断)

の正確さを向上させただけなのかということであった。しかし、情報処理の機能的コンポーネントを要素とする理論が発展するにつれて、そのような単純な区別では、対立する理論の違いを実験に反映させることが難しくなってしまった。例えば、Lowrence and Coles (1954) は、「構え」をつくるために刺激呈示の前に呈示される情報と同じものを刺激後の反応選択肢として、すべての条件で用いることによって、反応時点での判断を容易にする要因を統制できると考えた。このような統制によって「構え」の効果は消失し、それまでの条件差は反応要因だと結論された。しかし、後に Egeth and Smith (1967) は、実験法を改良して、肯定的な結果を得ている。ところが、ほとんど同じ実験法を用いた Gummerman (1970) の実験は、まったく逆の結果を示した。そして妻藤 (1980) は、これらの実験で正答率を調整するための逆行マスキング刺激に異なる性質のものが用いられており、そのために上記の違いが生じたことを実験によって証明した。

この最後の実験は、問題が単に知覚か反応かという2分法では扱えないことを示している。すでに Haber (1966) は、知覚と反応の間に介在する記憶システムについて考察しており、複数の記憶システムがある場合、被験者自身が、知覚と視覚情報ストアの区別ができないという可能性を指摘している。そして、妻藤 (1980) の実験は、さらにより細かく分解された処理過程を持つ理論が必要であることを示している。つまり、異なるタイプのマスキングは抹消から中枢に至る情報処理の流れの異なる位置に作用すると考えられて

おり (Turvey, 1973 ; ただし, Saito, 1982が示したように, 文字等のパターンの同異判断の反応時間を指標とした, フラッシュマスキングの場合, それが提示されるタイミングによって効果の現れ方が異なり, 上記のような解釈よりもさらに複雑な理論が必要であるかもしれない), マスキングの種類によって, 異なる「構え」効果が得られるのならば, 知覚と反応という2分法は全く意味を失ってしまう。そして現在の意識理論の文脈から見ると, そもそもこのような機能的理論では現象経験の「位置」は, (どのような理論を立てようとも) 理論上の必然ではない (妻藤, 1993)。閾下知覚や知覚的防衛についても同様の論争があり, 現在では単なる反応要因ではないと考えられている (e.g., Erdelyi, 1985)。ただし, その機能的位置については, 必ずしも明確でない。

より単純に, 被験者に意識していたかどうか尋ねるといことも考えられる。Chapman (1932) は上記の「構え」効果の実験において内省を求め, 「構え」のあるときの方が, 実際によりはっきり見えたという報告を得ている。また妻藤 (1979) ではこの「構え」効果について, 試行ごとの確信度評定値の平均を, マスキング条件ごとに比較して, 妻藤 (1980) の正答率を用いた実験とほぼ同じ傾向を見だしている。しかし, Haber (1966) は, 急速に衰退する記憶像と不明瞭であった知覚を内省的に区別できるかどうかを疑い, 根拠にはできないと結論している。もう少し進んだ方法として, Cheesman and Merikle (1985) は, 客観閾値と主観閾値の区別を導入した。前者は判断結果がちょうど確率水準 (でたらめを答えたときの正答率) になる刺激強度であり, 後者は確信度が確率水準 (確信がゼロ) になる刺激強度である。これによって彼らは, 単語の認知について, 主観閾値が客観閾値よりも高い, つまりもはや自分の判断にまったく自信が持てないという条件でも, まだ正答率は確率水準より上であることを見だした。しかしこの場合ですら, 確信度が「意識」の直接の指標であるかどうか論争の余地が大きい。後で議論するように, 確信がなにを反映しているのか, 仮説以上のものはまだないからであ

る。

少なくとも, 上記のわずかな例からでも, 行動上の「反応」から実際に何を「意識」しているのかを議論の余地なく結論することは難しいといえよう。このような測定は必ず「機能」を前提としており, それについての確立された理論がなければ, 「現象経験」については推論でしかない。

しかし, このような議論の仕方自体にも問題が含まれている。直接他からは伺い知れない心の中の出来事と, 観察可能な行動という2分法である。その「現象経験」の持主のみが「特権的に」アクセス可能な経験内容として, 意識が捉えられるのであれば, それは現代的意味での2元論と見なされるかも知れない (e.g., Eiser, 1994)。そして, 今度はその「2元論」自体を認めるかどうかという論争に発展する (行動主義は克服された過去のメタ理論ではない : e.g., 麻生, 1994)。もともと「意識」が, それの果たす機能として把握可能であればこのような問題は最初から生じない ; しかし, そこからすり抜けるなものかが, (哲学はともかく) 心理学にとって無視できるのかどうか, どちらの立場をとるにせよ, これまで「作業仮説」以上の根拠はなかった (e.g., 妻藤, 1992;1994)。

3. 「態度」と主観

Eiser (1994) は, 「態度」を述べる文が単なる任意の感情あるいは主観状態を述べたものではないと主張する。それは, その人にとって何が客観的に正しいかを「主張」するものであり, ただ, 個人間で必ずしもその「主張」が一致しないようなものと定義する。その根拠は, 簡単には要約できないが, 2元論を避けた上で主観を記述するメタ理論を前提としている。つまり, いわゆる (自身の身体の外部的についての) 知覚が (単にその人のみが特権的にアクセスできる主観ではなく) 間主観的にリアリティを与えることを根拠としている。純粹に個人の経験の現象のみをデータとして考察を進めると, わたしの見ているものと, あなたの見ているものが同じであるという結論を導くことはできない。そうではなく, 例えば見えているという出

来事が、単にそのような主観が存在するというのではなく、わたしと、そこにあるものとの関係が経験されているという記述をしなければならない。すると、実際にそこに存在する対象が同一であるとき、他者がその対象とその人との関係を経験しているなら、それについて語る発話は、その対象を媒介として「理解可能」になる。知覚は「について (aboutness)」という性質を持つ（ここでは志向性よりも広い意味で使われている）。そして、(ウイットゲンシュタイン流に言えば)、2者が同じ言語ゲームを共有するとき、この「について」が一致し、会話が可能になる。知覚されている「内容」は、単なるイメージではなく、自分とその対象「について」の関係の経験であるから、その表現された「関係」が自分とそれとの「関係」と同等のものであるかどうかを、その言語ゲームの参加者は判定することができる。そして Eiser は、「特権的」と見なされがちな、痛みなどの身体感覚や気分なども、実際にはこれらの点で同じことであると結論している。単に「について」が、身体の外から中へと移動したのにすぎない。ただ、これらについてのコミュニケーションが難しいのは、他者が、その痛み（など）と直接の関係を持つことができないから、「関係」を比べ合うことができないためである。

本人にしかアクセスできない特権的な意識内容を前提することによって、外一中という2元論的思考に導かれてしまう。多くの社会心理学者は、「態度」や原因帰属を扱うとき、多くの人（愚かにも）2元論的な信念を持っており、その信念の法則を見いだしたかのように述べてきた。ところが一方で、「内的」原因と外的行動の対応や一致あるいは共変化について語ることによって、自分自身が2元論にとらわれていることを露呈してしまっている (Eiser, 1994, p.81)。

ここで知覚が、物理的世界について他者と共有するリアリティを与えるものとして扱われ、それと同等のものとして「態度」の表明も扱うならば、これもまた、他者と共有すべきリアリティに関係していなければならない。Eiserは、自分にとっての社会的リアリティを他者と共有するために行われる会話をその証拠とし

て挙げる。つまり、わたしとある社会的出来事「について」の「関係」を他者と共有しようとする活動であり、他人に関する噂、ゴシップもその例である。ただし、これは物理的リアリティの場合と違って、他者が同種の「関係」を持っていることを表明するとは限らないわけである。ここでの「関係」はその対象に対する「評価」を含んでおり、その点で全ての人が同種の「関係」を持つわけではない。ただし、その「評価」は、知覚の場合の「関係」と（少なくとも基本的には）同じ性質をもつ関係であるため、その人にとっては評価というより「客観的」に正しいという「主張」として述べられることになる。

このメタ理論を2節で述べた問題と関係づけるならば、その人によって述べられている「態度」文が、その人の社会的リアリティを忠実に反映しているかどうかということになる。しかしこの点で、2節と同様の考察を行うと、同じような問題がやはり発生するように思われる。現象の取扱という面では、2元論的メタ理論は克服しているとしても、それらを実際に引き起こしている機能に関する理論を作り出そうとすると、2節の問題が再び戻ってきてしまう。つまり、(もし)それが複数の処理過程に分解できるならば、「意識」の位置について(たとえ過程のすべてが、全体として「意識」を生み出すのだとしても、「意識」をそこに「現象経験」として取り込むことが理論的必然であるかどうかという点で)再び論争が発生する。

「態度」が「客観的」正しさに関する「主張」だとしても、そこには、絶対的な信念から、疑いにいたる確信の程度を考慮しなければならない。実際、「態度」測定尺度はしばしば、「そう思う」程度を測定しようとする。そして、例えば態度変容手続きの効果が、その測定値(程度)の変化によって定義される。そうなると、そこに(「客観的」に正しいと思う)確信の程度が理論の中に入ってこなければならない。知覚の場合でも、刺激縮減事態での、知覚判断の確信度が問題になる。しかし「態度」の場合、より以上に信念レベルの関係は密接なものと考えねばならない。そこでその確信度が何を示すのか検討しておく必要がある

だろう。

4. 確信度と信念

多くの確信に関する研究は、何等かの質問に関して客観的に定義される正答があり、実際の被験者の答えの正答率と確信度（しばしば自分の正答率の予測を確率で評定させたもの）の対応を調べている。典型的な考え方として、実際の正答率に基づき線型予測からのズレを計算し、これの2乗平均をキャリブレーションの程度とし、全体の平均、あるいは確率水準のどちらかを基準としてそれとの相対変動の2乗平均を解像度とする尺度が用いられる。あるいは、正答率に対する、単調増加傾向の尺度が用いられることもある(e.g., Yaniv, Yates, & Smith, 1991; Liberman & Tversky, 1993)。言い換えると、確信度評定は、集団あるいは被験者の自己評価能力を示すものとして扱われている。

明らかに、それは「能力」、つまり機能であり、Eiser (1994) が問題にするリアリティの概念とは何等つながりを持っていない。もしこのような、確信度の評定をそのまま「意識」をあらわすのだと解釈した場合、まずまちがいがなく反論が現れる。

Wallsten and Gonsalez (1994) は、ある事実を述べる文（「カリフォルニア州はアラバマ州より人口が多い」など）の真偽についての判断と確信の理論を提案している（確信度評定自体の数理モデルは次の論文で詳述される予定であるが、基本的理論構成は変わらない）。このモデルは、その文の呈示後、記憶の検索と「内的」判断が行われ、その文が真であることを示す「内的」強度の値が（何等かの形で）計算されると仮定する。そして、この値は、正規分布するものとし、さらにそれに（試行ごとの）正規ノイズが乗ることによってばらつく。そして、その文が真でないという（「内的」）判断も同様の確率分布を持っており、この2つの分布の兼ねあいと、（「外的」反応の）判断基準によって、「外的」反応が起こる。このように機能を分解して、処理・判断の「メカニズム」を理論化し始めると、直ちに、「意識」されている（いた

ことがら、あるいは（この場合）意識されていた確信の程度は、何であるのか決定できなくなる。この理論的モデルは、単に事実命題についての真偽判断に限らない、一般的な理論として発展していくはずのものである。もし、（例えば政治あるいは教育などについての）ある態度を持った人がおり、（Eiser, 1994, のように）その態度が、その人の社会的リアリティに関する客観的正しさについて、最高の確信を伴っているものとしよう。その信念について尋ねられたときに「意識」されているのは、その信念をあらわす情報の確かさ（「内的」強度）の値（あるいはその強さの印象）なのか、それとも、「外的」判断基準に照らした後の、「正しい」という「意識」なのか。

このようなモデルは情報の検索・処理・判断のアルゴリズムとその情報の確率に関する数学的表現から成り立っている。したがって、これらの処理・判断過程のすべてが全く「意識」を伴わない「機械」によっても実行可能である。つまり、どこに、あるいは、どれが意識されるのかについては、この理論からは何も言えない（もし、仮定として「意識」を導入したとしても、すでにそれなしにデータを予測出来ているために、その仮定は理論上の意味を持たない）。

この考察では、Wallsten and Gonsalez (1994) の用語をそのまま使い、「内的」「外的」とした。しかし、必ずしもこれが、Eiser (1994) の問題にする2元論とみる必要はない。なぜなら、この理論は「現象経験」について何も語っていないので、「外的」という用語も、単に実験者あるいは実験用コンピュータの入力装置に対する「答え」を「選ぶ」ということでしかない。そのため、この数理モデルは、「意識」に関して全く別の解釈をすることもできる。例えば、この処理・判断過程は、その最終出力まで含めて、すべて全く非意識的であり、意識されているのは、その「答え」あるいは「態度」の内容だけであるといっても、理論自体と矛盾するわけではない。つまり、確信の程度を問われたときには、「強度」に「判断基準」を適用して、評定値を答えることができ（その評定値は当然意識できる）、必要ならそれを、さらに「意識」

的吟味の材料に使うことが出来るとしても、それはそのように確信を数値化した時だけであるかもしれない。そして、意識上「自信がない時」とは、そのような確信の程度を意識しているのではなく、他の選択肢の方がよいかもしれないという、漠然とした「不安」という形で自覚しているのかもしれない。おそらく、このような解釈が正しいかどうかを内省によって決定しようとしても、確信の度合を数値表現しようとすればできるために、意識によって「意識」を観察することによる「意識」の変化が当然見込まれることになる。つまり、言葉で表現すれば「自信のなさ」であり、数値で表現すれば確率30パーセントであるようなとき、それぞれの表現の仕方によって、もとの心的内容を変えてしまう可能性がある。この「もとの心的内容」が実際にあったかどうかすら問題であって、このような「表現」が、上記のように全く非意識的（「内的」）強度であり、意識的な内容がそれと一致していたかどうかすら疑うことができる。

上記のように解釈された理論はEiser (1994) の主張と、矛盾するわけではない。「関係」の対象が身体の外ではなく、自分の脳が行う情報処理過程あるいはその結果となっただけだからである。もちろん、それらを機能的に認識しているわけではなく、また認識できるのもごく一部でしかない。また知覚も、例えば色をそのように見るのは人間がそのように意識するからであって、色の現象学的特性は物理的に決っているわけではない。これと同様に、「態度」、「信念」、「確信」も、処理装置とその出力に対して、それをどのような「現象経験」として意識するかは、処理過程についての理論とはまた別の問題である。

生きられる現実としての「意識」が持つ様体は、意識によって観察された、対象としての「意識」には現れない（妻藤、1992）という考えが正しい場合、先の知覚的「構え」も含めて、「態度」等も内省によってその性質を把握することはできない。そしてEiser (1994)の「リアリティ」が、この「生きられる現実」のことを指すのであれば、いかなる心理的測定も、（行動主義あるいは徹底的機能主義によって「現象経

験」を無視しない限り）それが何を反映しているのかを特定する理論が必要になる。

5. 「生きられる世界」と「行為」

Eiser (1994) が提案するパラダイムは、人の「態度」の安定と変化を説明する位相空間である。社会心理学上の「態度」が1次元ではないことがまず強調される。賛成あるいは反対などを両極とする1次元線分のどこかにその人のある「態度」が表現されるのではなく、多次元でなければならない（それが最終的な理論であるかどうかは別として、オスグッドの意味微分法の出力が3次元であるように、ある特定の時点での「態度」を単なる線分上の一点と見るのではなく、空間内の一点で表すことである）。Eiser の主張の新しい点は、そのような（仮想）空間が、（これまでの社会心理学や人格心理学が、暗黙に仮定していた）ユークリッド幾何ではなく、一様でないという性質を持つところにある。この「態度」空間は、その中に山と谷を含んでおり、「態度」点はその地表から下に行くことは出来ない。さらに各点はその「高さ」によって位置エネルギーを持っており、もし外乱によって「飛び上がった」としても、必ず地表に落下する。（非線型力学系の用語で表すと、山頂は反発不動点、谷やくぼみは吸収不動点などとなるだろう。）このとき地表の深くくぼみに入り込んだ点は簡単にはそこから出て行くことができない。つまり、「態度」変容が困難であるのは通常このためだと「説明」される。これらの局所的くぼみは、必ずしも最小の位置エネルギーに対応するとは限らない。山の中腹にあるくぼみの場合もあり、また平地より低いところに谷があるかもしれない。通常の生活をしているとき、外乱（地震）の規模は小さいため「態度」は安定しており、人は自分の社会的リアリティを守ろうとして、しばしばかたくなである。しかし、（日常的言い方をすれば）信念を揺るがすような強い体験をしたとき（例えば、ある教師が自分の教育方針を絶対的に否定するような体験をしたとき）、この外乱によって「点」が揺らぎ、それが十分に大きければ、くぼみから飛び出す。もし、そのく

ほみが山腹にあり（ゆらぎの到達範囲に変曲点があれば）「点」はくぼみの外にある斜面を転がり落ちて、次のくぼみあるいは（場合によっては）谷底（最終的なアトラクタ）に達する。これが「態度」変容である。この「態度」空間の地形は、発達過程を通じて学習される。

このEiserのモデルは、これまでの「過程」の理論といささか異なる面を持っているように思われる。どのような情報処理、学習、強化のスケジュールなどの機能的という意味での（実際に「内的」にあると仮定されるような）メカニズムには、一切言及していない。このモデルはあくまで「態度」あるいは「信念」の現象的記述であり、位置エネルギー最小に向かっての「移動」、「地形」、「地震」なども、すべて「仮想空間」のなかの構造と出来事である。この意味で、これまでの心理学の理論と比べて極度に抽象化された人間のモデルになっている。しかも、これは「意識」世界、生きられる現実の中での出来事を（ある意味で）象徴的に表現しており、しかし単に象徴的なのではなく、実際に起こる意識世界の変容と、（それだけではなく）それによって起こる「行為」をも予測しようとする。意識内容自体の因果関係ではないが、この仮想空間での出来事は、その因果関係を（機能的な原因までも含めて、あるいは区別しない形で取り込んで）一度に表現してしまおうとする。

Eiser自身は、このようなモデルが物理学において、しばしば用いられると述べ、そのテクニックの応用であると考えている。しかし、この点については同意し難い。なぜなら、物理学の場合、そのような仮想空間は、例えば運動量や位置等についての理論が前提としてあり、しかも、それらの理論は「実在」と直接関わっている。そして、複数の点の軌道を一度に表したり、1つの点であってもその軌道を一度に表現するために、この仮想空間が使われる。例えばこれによって、一見ランダムに見えるカオス軌道に高次のパターン（ストレンジアトラクタ）があることを見いだせる。一方、Eiserの方法は、数学上は同様のものであっても、基になる力学上の理論（この場合は処理過程と

「意識」の変化に関する理論）から構成されるのではなく、心理学上の現象を、より抽象的な構造で「表現」することであり、それは心理学の（理論の）記述レベルをそこに置く方がよいというメタ理論だと解釈する方が妥当であろう。物理学の場合、もともになるより具体的な理論が仮想空間内の出来事を「意味づける」のだが、後で述べるように、Eiserのモデルは、逆に仮想空間の方が、より低次の表現である「過程」の理論を「意味づける」とみなさねばならない。この点でEiser自身の解釈には同意できない。

これまでの心理学のパラダイムの違いについて、さまざまな議論があるとしても、現象の記述レベルの違いという観点で分類することもできると思われる。構成主義は感覚要素、つまり「意識」の構成要素を見いだそうとした。ゲシュタルト学派は、構成要素ではなく「意識」の構造をいきなり記述しなければならないと考えたが、あきらかにこれは理論の記述レベルの違いともいえる。そして行動主義は、「外部」から観察可能な行動、そして認知派は「内部」の処理を理論の記述単位とする。これらは、一見対立するようであるが、じつはそれほど違っているわけではない。行動主義の「行動」とそれに関連する理論上の用語は日常用語ではなく、「刺激」による「反応」の惹起であり、「オペラント」の「強化」である。「彼をもともと憎んでいたのに、仕事上の対立がどなりあい発展した」のではなく、「彼から受け続けた強化と罰のスケジュールによって、攻撃オペラントの出現確率が高くなっていったところに、仕事上の条件による刺激統制がその攻撃オペラントを解発した」ということになる。（認知科学と表現した方がよい立場の理論は別だが）、伝統的認知パラダイムによって、以上の文を、原因帰属と感情の関係およびそれらによる2者関係の理論的記述に置き換えるのはさして難しくない。この意味で記述レベルがそう大きく隔たっているわけではない。これらとはっきり異なる記述レベルを採用しているのは、（神経レベルを扱う）生理心理学と認知神経科学である。そして、もっとも日常的用語に近いものを用いるのが精神分析あるいは多くの臨床心理学である（認知

療法も、認知心理学自体よりも、日常用語に近いものを使う)。ただし、これらも記述レベルという観点では行動主義や社会心理学的認知心理学とそう隔たつてはいない。認知科学よりの認知心理学の理論は、知識構造、並列分散処理などのように、神経科学よりは高次だが、行動主義や伝統的認知心理学より低次の構造を扱おうとしている。Eiserのメタ理論はこれらのどれよりも抽象的な表現を、心理学にとって最も適切な記述レベルとして提案していると思われるであろう。

心理学が何を明らかにするべきであるのか、再びそのような質問が寄せられはじめたということなのであろうか。理論の記述レベルを移動させるということは、(全面的ではないにせよ)パラダイムを(少なくともその重要な部分で)シフトさせることになる。興味深いことに、このEiserの提案は、「内部」でなにか起こっているのかを問うのではなく、「内部」でも「外部」でもないところ、「仮想空間」に理論を置き、「意識」と「行為」を、区別なく説明しようというものである(もっとも、これは筆者による位置付けであり、Eiser自身は、かならずしも、そう考えているわけではない)。「知覚」か「反応」か、「認知」か「反射」か、などは意味を持たない。「仮想空間」に表現されている地形は、実際に起こってしまった事柄や、いま進行中の「意識」や「行為」を説明するのではない。何が起こり得るか、何は起こらないか、そして何が起こりやすいかをあらわすものであり、前提として重力系の力学という意味で決定論でありながら、いつ何が起こるかは、原理上、予測できない(上記では詳述していないが、「地形」はフラクタルであると仮定されている)。

従来の発想からすると、このような立論は、実在をそのまま反映しようとした「理論」ではなく、便宜上のモデルとみなされるかもしれない(理論と一対一対応しているが、理論そのものではなく、それを理解しやすくするための模型である)。しかし、これはその様な意味でのモデルとは決定的に異なる性質を持っている。これは、妥当な記述レベルがそこにあるという含みを持っており、そのため、これが理論そのものに

なるからである。

実際には、Eiser(1994)は、後の章でコネクショニズムと対応させ、その並列分散処理の力学を一度に表現するものとして、「地形」を関係づけている。しかし、それは生理学と心理学の関係と同様に、メカニズム(並列分散処理)と心理現象の対応であるとみなすべきである。Eiserが、その問題として困難を認めているのは、個人が分散回路で表現されると言えるだけではなく、個人間の関係も同様に分散回路であらわせるという点である。つまり、人間関係も(一つの集団、社会も)並列分散回路として表現可能であるため、個人の回路を要素として集団の回路をつくったとき、個人を区別することが出来なくなる。もちろんその回路の要素間での結合が少ないところが、個人の境界である確率が高い。しかし、それは、可能性が高いつしか、理論上はいうことができない。それどころか、極めて親密な2者、あるいは互いに適応過剰であるような2者の間には、かなり密度の高い結合があるはずで、そのため、このような場合には、個人の同一性を定義できなくなってしまう。しかも、(Eiserは述べていないが)それを、同一性の拡散などと結び付けることはできない。もしそれを認めると、同一性の確立が、他者との相互作用をしなくなることに対応してしまうからである。これについても、筆者による前述の解釈(位置付け)をとる方が問題が少ないように思われる。つまり、心理学のレベルとして、基本を仮想空間に置き、その「仕掛」として分散回路を考えればよい。この場合個人は、その個人の仮想空間に対応する「回路」であり、ある集団の仮想空間に対応するのが、それに対応するより大きな「回路」である。

このように、考えることで哲学上の問題は、「意識」とは何かという質問を迂回してしまう。内省は、知覚における対象が身体の内側にあるのと同様だとして、内省の「原理的」特権性を廃し、かつ、「自己」も、実体としての存在ではなく、知覚される自分である(この点で、妻藤、1991、と、論点は異なるが、類似した結論になる)。そして「内なる目」も仮定する必要はない。仮想空間上の地形のある位置に「点」があ

ることによって、そのように受け取られ、また（あるいは）行動されるというだけである。しかし、「意識」の問題をこのようにして解決できたかどうかは別として、十分有望なメタ理論であるとは言えよう。ただ、これでもまだ残る問題は、2節－3節で議論した、「態度」「信念」の「程度」とその測定である。

6. 「地形」モデルの変更と付加

この節では、Eiser (1994) のメタ理論のモデルをもとに、いくつかの仮定を付け加えてある程度具体的モデルに近づけてみる。ただし、メタレベルにおいても、必ずしもEiserそのままではない。ここでは、基礎研究分野でよく用いられる確信度などについても考慮する。ここでの目的は、その付加と変更によってできる具体的モデルが直接データを説明できるかどうかを調べるのではなく、前節までの疑問点を解決できる可能性が少なくともあるかどうかを検討するためである。

まず、ある「態度」あるいは「信念」に関する状態を「点」とする。ここでは、個人というより、その人がいま関わっている態度対象、あるいは問題状況に関連したその人のスタンスを表すものとする；前者の場合「点」の位置が「態度」であり、後者の場合「信念」である。（ここでEiserのもとのモデルと異なる仮定をすることになるのだが）この意味での「点」について、これの「重さ」を考える。これは、その個人にとっての、その態度対象あるいは問題状況の重要性を表す尺度である。そして、その「点」がいまある場所の、周囲の状態（谷、くぼみ、山腹、そして地面の状態つまりでこぼこの程度）によって決める係数を「抵抗」とする。これは、そこにある「点」が動き出す、あるいはくぼみの外に出てしまうことに対する抵抗とする。そして、その「信念」や「態度」について、それ以外の選択肢が、意識されているかどうかにかかわらず、知識システムの中でその「信念」や「態度」を揺るがす程度を、「震度」とする。「確信の程度」を内省するたびに、「それ以外の選択肢」がエネルギーを与えられ、「地震」を引き起こすと仮

定すればよい。強い情緒的体験も、この「地震」を引き起こすのだが、これも、それまでの自分の「信念」以外の選択肢が、その体験によってエネルギーを与えられ地面を揺らすのだと考える。

このような5つの変数と、位置エネルギーの6つを考えると、次のように、これまでの理論と異なる面を持つ説明を行うことになる。

「信念」や「態度」の変わりにくさは、単にそれを信じている程度によるのではない。まず、これまでの処理過程理論を参考に、確信度が「震度」に影響されると予想しよう。この揺れがまったくないとき、確信度は絶対的の信念に対応する（この点について、おそらくEiserは賛成しないと思われるが）。揺れが大きくなると確信は減少する。確信度が「点」の運動エネルギーの減少関数だと仮定してもよいであろう。これは速度と質量（ここでは「重さ」）で決るので、本人にとって重要な問題であるほど、揺れにくく、確信度の低下は起こりにくいが、一度大きく揺れはじめると、それを止めるのはかえって難しくなる、と予想される。もし軽い「点」であれば、揺れはじめても地震が終ればすみやかに「点」のゆれもおさまるが、一方重い「点」の場合、なかなかおさまらず、そこに続いてもう1つの地震がくると、その2番目の「震度」が小さくても、「点」は「くぼみ」を飛び出してしまう確率が高くなる。もし「くぼみ」を飛び出してしまうと転がって次の「くぼみ」あるいは「谷」で止まり、態度変容あるいは信念の変化が生ずる。飛び出すかどうかは、揺れの大きさだけではなく、地面の状態と「くぼみ」の深さ（「抵抗」）によっても変わる。この「抵抗」を、人格変数と見れば、態度や信念を変えることによって生ずる、プライドの低下に絶える力の弱さ、あるいは情緒的体験への感受性の低さなどと解釈できる。また位置エネルギーは、それが低いほど、次の態度や信念の変化が少なく、また変化の速度も遅いということになる。

そして「震度」が強すぎれば、「地形」が変化する。これは潜在的態度構造（仮想空間自体の構造）が変化することに対応する。このとき起こるのは崩れること

によって山が割れ、新しいくぼみ、あるいは谷を作り出すであろう。一方、子供の発達段階を通じて、造山運動があり、はじめは比較的急激に、しだいに速度をゆるめながら続く。造山運動は経験が潜在構造を変えていくという意味で学習ともいえる。これは経験によって自身を作り変えていくことであるが、ただし直接、行動や「意識」に現われるのは、各々の事態や対象、問題に関わる「点」の位置である。この学習は、「意識」されず、また行動にも現れていない、その人の可能性まで含めた変化を指す。年齢を重ねたとき、この「造山」活動が早く衰える人と、かなりの年齢まで続く人がいるであろう。

以上を日常的用語で言い直すと、次のようになる。本人にとって（プライドにとって、これまでの生き方にとって、経済的な要因にとって）重要な事柄であるほど、態度や信念は変わりにくい。また同じ態度や信念に留まっているときの確信度も変化しにくい。しかし、もしこれが何等かの強い体験によって（例えば、ある教師の指導の結果、生徒が自殺したなど）大きくゆさぶられたとき、その信念が、その人（その教師など）にとって重要なものであるほど、確信度の低下は大きく、また態度変容や信念の変化も起こりやすい。ただし、それは、その人の人格によっても異なり、「しがみつく」タイプの人であれば（あるいは、共感性を欠く人格障害、あるいは社会的圧力に屈しやすい人など）、それに抵抗する。ここで重要なのは、確信の強さと、変化に対する抵抗が必ずしも一致しないということである。絶対的に信じているわけではないが、その考えをまったく変えない場合もあるということである（証拠が不十分であることを十分に認識しており、自分でも確信がないと感じていても、なおそれ以外の選択肢を認めない）そして、逆に、時には強すぎる情緒的体験によって、潜在的な面まで含めて「人変わり」してしまう場合もあると予想される。

以上のように、これまでの理論が別々に扱ってきた事柄（認知、人格、社会）を統一的に「説明」することができる。もちろんこれは各々の予測について、個別のデータによって検証しなければ、具体理論とし

ての価値はないのであるが、ここでのメタレベルの目的は、このようなパラダイムが、実際に使える可能性があるかどうかであった。ここでは、可能性は十分にあると判断してよいであろう。

7. 要約と結論

これまでのパラダイムを維持したままで、「意識」を理論化するには測定の意味を問いなす必要があると結論せざるをえない。それには、哲学的問題まで含む議論が必要になり、まだそのほとんどが解決されたとは言い難い状態である。一方、機能レベルではなく、また「現象経験」レベルでもない、より抽象的なレベルで、人間の「意識」と行動について（それらの区別なく）、出現可能なもの（およびその程度）、そして出現不可能なものを記述するという Eiser (1994) のパラダイムについても検討された。これは有望なものである。とくに、この機能レベルから見ればメタ記述である理論が、機能レベルの理論である並列分散処理モデルと直接に接続が可能だけでなく、メタレベルの理論が、機能レベル自体ではできない意味付けを与える（並列分散回路における、社会集団内の個人の特定、および特定出力の意味を与える）という点で、この方向の理論が進歩することで、「意識」測定の解釈を明確な根拠あるものに持ち込める可能性があると思われる、その具体的理論が提案された。

引用文献

- 麻生 武 (1994) 「閉ざされた行動主義」から「開かれた行動主義」へ。日本心理学会第58回大会発表論文集, S77.
- Chapman (1932) Relative effect of determinate and indeterminate Aufgabe. *American Journal of Psychology*, **44**, 163-174.
- Cheesman, J. & Merikle, D.M. (1985) Word recognition and consciousness. In D. Besner, T. G. Walker, & G. E. Mackinnon (Eds), *Reading research: Advances in theory and practice*, No. 5. New York: Academic Press.
- Egeth, H., & Smith, E. (1967) Perceptual selectivity in a visual recognition task. *Journal of Experimental Psychology*, **74**, 543-549.

- Eiser, J.R. (1994) *Attitudes, chaos, and the connectionist mind*. Oxford: Blackwell.
- Erdelyi, M. H. (1985) *Psychoanalysis: Freud's cognitive psychology*. New York: Freeman and Company.
- Gummerman, K. (1970) Knowledge of alternatives and perception of tachistoscopic stimuli. *Journal of Experimental Psychology*, 358-390.
- Haber, R.N. (1966) Nature of the effect of set on perception. *Psychological Review*, 73, 335-351.
- 柿崎裕一 (1967) 最近知覚心理学の一問題: 知覚と反応(1). *心理学評論*, 10, 229-256.
- 柿崎裕一 (1974) 知覚判断. 培風館.
- Liberman, V. & Tversky, A. (1993) On the evaluation of probability judgments: Calibration, resolution, and monotonicity. *Psychological Bulletin*, 114, 162-173.
- Lowrence, D.H., & Coles, G.R. (1954) Accuracy of recognition with alternatives before and after the stimulus. *Journal of Experimental Psychology*, 208-214.
- Marcel, A.J. (1988) Phenomenal experience and functionalism. In A.J., Marcel & E. Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp.42-77). Oxford: Oxford University Press.
- 妻藤真彦 (1979) 選択的情報処理と覚知. *人文論叢*, 7, 55-64.
- 妻藤真彦 (1980) 知覚的セットおよび選択的情報処理. *心理学研究*, 51, 1-8.
- Saito, M. (1982) Same-different reaction times studied with a flash masking technique. *Perception & Psychophysics*, 31, 573-576.
- 妻藤真彦 (1990) 認知心理学における「意識」と「測定」. In 大阪市立大学文学部心理学教室四十年のあゆみ (pp. 564-576). 大阪市立大学文学部心理学教室.
- 妻藤真彦 (1991) 認知理論における「自己像」の機能的役割. *美作女子大学・同短大部紀要*, 36, 1-10.
- 妻藤真彦 (1992) 「意識」概念の心理学的再構成: コウモリではなく人間であるとはいかなることか. *美作女子大学・同短大部紀要*, 37, 1-10.
- 妻藤真彦 (1993) 根拠を述べるができない確信と「意識様態」. *美作女子大学・同短大部紀要*, 38, 1-10.
- 妻藤真彦 (1994) 機能的にとらえられない「意識」の性質の存在可能性. *美作女子大学・同短大部紀要*, 39, 21-30.
- Turvey, M. (1973) On the peripheral and central processes in vision. *Psychological review*, 80, 1-52.
- Wallsten, T. S. & Gonzalez-Vallejo, C. (1994) Statement verification: A stochastic model of judgment and response. *Psychological Review*, 101, 490-504.
- Yaniv, I., Yates, J.E., & Smith, J.E.K. (1991) Measures of discrimination skill in probabilistic judgment. *Psychological Bulletin*, 110, 611-617.

(1994年12月1日 受理)